教職教育とアクティブ・ラーニング

永作　稔

１．はじめに

本研究では、教職に関する科目の必修科目である教育相談において実践されたジグソー法による発達障害の理解の促進について報告する。教職教育においてはアクティブ・ラーニング（以下 AL）とは何かを教えることはもちろんのこと、AL によって学生の主体的な学習を積極的に促すことや、学生が将来，AL の手法を用いて授業を展開することができるようにしていくこと、つまり AL「で」教えられる教師を育てることが重要である。そこで本研究では教育心理学で学んだ教授学習法であるジグソー法を実際に体験することで学生がその有用性を実体験から理解し、将来の指導技術として習得することをねらいとした。そのため、本研究は何かのテーマについて自分の意見を表明し、相互作用による気づきや学びの促進をねらったアウトプット型の AL というよりも、むしろ知識習得や定着をねらったインプット型の AL の特徴を強く有する実践となっている。

本研究の特徴

特徴１：AL の有用性を実体験することに主眼を置くこと

特徴２：知識のインプットに重きを置いた実践研究であること

特徴３：学びの積み上げ（教育心理学から教育相談）を基盤にした実践であること

特徴４：中規模人数クラス（出席者 80 名）での実践であること

２．方法

使用教材：①ワークシート…発達障害とは何か、LD（ADHD、または自閉症スペクトラム障害）とは何かという調べ学習をするもので、テーマ記号と記入枠を設けている。テーマ記号は４種のトランプマークである。②トランプ２組…学生に引かせて同じトランプかつ同じ数字（A～10）カードを持つ４人のグループ（元グループ）を作ること、および同じトランプかつ同じトランプマークのカードを持つ作業グループを作ることを目的に使用する。③発達障害関連図書資料…教室内で調べ学習ができるようにするためのものである。

展開：元グループを作り互いにメンバーを確認したのち、上記テーマについて調べたり検討したりするための作業グループに分かれた。また「それぞれが調べてまとめてきた内容が、元グループメンバーの学習内容になります。間違った情報はそのまま他のメンバーの誤学習に直結するので各自責任感を持って取り組むこと」と教示した。

３．結果と考察

授業のおわりに記入させた小レポートには、「普段の授業よりも集中して取り組めたし、よく理解できたと思う」、「責任が重いので、大学に入ってから一番真剣になった授業だった」、「他の授業でももっと AL を取り入れた方がいいと思う」といった感想が多く見られ、AL の有用性を実感できた様子であった。したがって、本研究のねらいは概ね達成できたものと考えられる。一方で、ジグソー法により学習へのモチベーション喚起や知識の習得・定着に一定の効果が見られたものの、「自ら考え、意見を言語化して他者と共有し、相互関係のなかで学ぶ」といった側面は十分にねらうことができなかった。そのため、このような側面についてはまた別のテーマや手法によって重層的に実践を展開していく必要があると考えられる。